



のは失礼ですと。そして最初に教えるのは、休むときの電話のかけ方です。本人がかけられるようになったら、それは家族でなくても構わない。でも最初のうちは必ずかけてくださいと。おじいちゃん、おばあちゃんも含めて家族に必ず念押しし、理解してもらいます。

日本語能力試験をなぜ受けさせるのかとよく聞かれます。地

域の中で、単なる日本語の上手な外国人と、試験に通った外国人とは受け入れ方が全然違います。試験を受けた場合は、全部私は新聞社に知らせて、小さくてもいいですから、載せてもらいます。そうすると、地域の中で、この人は頑張っている人だというふうに伝わってきます。もっとメリットがあったのが、ハローワークでした。職安では「あなたは日本語をどこかで勉強していますか」と聞くそうです。していない人は、「なかなか仕事がないですよ」と言われる。でも私たちの教室の生徒だと言うと、「ああ、あそこに行っているの」と。そうすると逆に、「うちで採用するから、もうちょっと勉強してもう1回受けに来なさい」と言われたとか。職安の方でもまた逆に、うちの教室のことを知っていますから、あそこで勉強している人たちなら、ちゃんと時間を守る、休むときは連絡をするなど、本来、外国人を雇用する際に一番問題になるところが、全部クリアできる。教室に来ている人たちは仕事が結構あります。ですから、日本語を学ぶことは、本当に必要なことだなというのが、私の考えです。

■学ぶ側の立場と考え

野山 どうもありがとうございました。北川さんがお話ししてくださった日本語教室でずっと学んでこられて、子育ても10年近くやってこられた、池田理恵さんから話をさせていただきます。池田さんの話が終わった後、私から池田さんに会話形式のインタビューをさせていただいて、感想などを引き出したいと思っています。

池田理恵 皆さんこんにちは。1996年に主人と結婚して、日本に住むことになりました。初めは日本での生活は大変でした。日本語が全く分からない私、主人の実家で義父と義母と一緒に生活するのに、会話はもちろんできない。交流は漢字を書いて何とか意味が理解できたけれども、たびたび理解できない場合もありました。

このような生活が2カ月たって、自分が困っているとき、主人の友達が、能代市文化会館に日本語を教えるところがあると知らせてくれました。早速、「のしろ日本語学習会」に駆けつけました。そこで北川先生と出会って、先生に日本語を教えていただきました。

◆ 教えられる立場から教える立場へ

1週間に1回、日本語教室に通って日本語を習いました。読み書きを続けて勉強をして、2000年に北川先生の勧めもあって、自分が今までどの程度の日本語を覚えているか試してみたかったので、日本語能力試験3級を受けました。そして合格しました。これを励みとして、2級まで頑張る気持ちになりました。01年、パソコンを習う機会がありました。最初、私はやはり自信がなかったので、家族と相談したら励ましてくれましたから、パソコン教室に通うことになりました。教室の中では、外国人は私1人だけでした。みんな日本語を当然のことですが、キーボードで漢字を打っています。私はなかなか正確に打つことができませんでした。そこでパソコンの先生が、私のためにわざわざ漢字を打つ練習用の文章を用意してくれました。分からない漢字の読み方は、先生、主人、義父、義母、みんな周りの人に聞いたり、辞書で調べたり、このことを繰り返して、漢字を読む力をつけました。

この調子で、日本語能力試験2級も順調に合格しました。翌02年、私は日本語能力試験1級に挑戦しました。これも合格しました。毎回、試験を受けるために、高速バスで試験会場に行くので、バス停まで送ってくれた幼い娘と別れるとき、娘は「ママ行かないで」と泣きだした場合もありました。家事、育児、仕事をしながら、1級まで日本語を勉強してこれたのは、これは自分が日本語を覚えたい気持ちもありましたが、日本語を熱心に教えてくれる北川先生をはじめ、ボランティアの方、そして応援してくれた家族もあり、いろいろな困難を乗り越えてこの結果が出たと思います。

私は今まで、いつも人の世話をいただいています。これから自分も何か役に立つことができませんか、と、北川先生に伝えました。ちょうどそのとき、能代市近くの二ツ井町から北川先生に、中国語を教えてほしいとの話がありました。そして北川先生は、私を紹介してくださいました。私は中国語講座の講師として、地域で日中交流にちょっと役に立って、本当にうれしく思いました。能代で日本語を勉強した思い出は、これから自分が日本語を続けて学んでいく原動力になると思います。ありがとうございます。

野山 池田さんには、私が前職の文化庁時代、日本語教育大会というのが、毎年8月上旬に行われていたのですが、その場にもおいでいただいたことがあります。そのときに、実は、直前にご家族に許可をもらいに能代まで行きました。池田さんはそのとき、あるところで働いていましたので、そこの工場長さんにも挨拶に行きました。そこまでしてようやく町から出てきてくださいました。都会に住んでいる人は、何もそこまでというふうにするかもしれないですが、地方ではそうはいかない事情がいろいろあります。

池田さんに質問ですが、最初に教室に行くときに、池田さんのご主人の友達が、たまたま北川先生の教室を知っていたということでしたね。ご主人は、この教室を最初、一緒に見学に行ってくれたのですか。

池田 はい、一緒に先生に挨拶に行ってくれました。

野山 ご主人は、この教室のことをどのように思ったのですか。

池田 みんな勉強していますね、と。教室は、共通語で教えてくれましたから、そのときは主人はまず、うちの中では全部方言で話をしますから、これはいいなと言って「勉強してみれば……」と言ってくれました。

野山 ふだん、方言で生活して、教室では共通語で話をしていることがいいと思ったわけですね。

池田 はい。

野山 北川さんは教室では共通語を中心に教えますけれども、必要になったら方言も教えてくださいと聞きましたが、やはり教室で方言も教えてくれましたか。

池田 はい。やはり最初は、日本語も分からないし、方言も分からないので、まずうちのおじいちゃん、おばあちゃんは方言を使う方が多いと思います、ですから、方言もときどき教えてもらい助かりました。

野山 勉強を1日1時間とか2時間とか。

池田 ほとんど2時間以上だと思います。仕事が終わってから帰ってきて、ご飯を食べて、また勉強をします。

野山 ご飯を食べて勉強をするときは、ご主人もおじいさん、おばあさんも含めて、協力的だったわけですね。

池田 はい、とても協力してくれました。

野山 そういう協力が実って、1級に受かる。受かったときに、先ほどの話だと、何かの役に立てばということをお北川先生に言ったら、ちょうどいいタイミングで、二ツ井町の公民館で中国語の……。

池田 私が日本語を習うのは、みんなボランティアで教えてくれていたから、今度自分が何か役に立つことができたらいいと思って、恩返しの気持ちで先生に言いました。ちょうどそのとき、中国語講座の講師の話があったのです。

◆ 暮らしてゆくために必要な日本語

野山 中国語の講座を持つときに苦労したことは何ですか。

池田 苦労したことは、やはり経験がないことです。

野山 教えるということに？

池田 はい。それで、先生が手伝ってくれました。

野山 北川先生も手伝ってくださって、無事に済みました。中国語の講座をやって、家族、あるいは周りのこととか、自分のこととかで何か変わったことはありましたか。気がついたこととか。

池田 中国語講座で、やっぱり地域の人との交流がちょっと……。

野山 進みましたか。

池田 はい。

野山 家族の間でのコミュニケーションというか、何か変化がありましたか。例えば娘さんが、中国語をもっと勉強したいとか。

池田 娘が中国語にちょっと興味を持ってきました。

野山 その後はときどき、娘さんに中国語を教えたりしていますか。

池田 今でもときどき教えたり。でもやはり、個人的に教えるのはやっぱりちょっと。人に習う方が、簡単かもしれない。

野山 なるほど。日本語学習をしている後輩にも、池田さんと同じように結婚したりいろいろな事情で日本に住むことになった外国人に日本語を勉強してもらうときに、外国人にどうして日本語を勉強するのと聞かれたら、何と言いますか。

池田 こっちで生活するなら日本語を覚えないと生活できない、と言います。まず、私たちは子どももいるし、子どもはほとんど日本語で話をしますから、親が日本語が分からないと、子どもと交流もできない。

野山 それは、娘さんが小学校に上がってから、やはり実感としてありましたか。小学校の先生と話をするとか、小学校のPTAの付き合いとか。

池田 ほとんど私が行きますので実感としてあります。おかげさまで日本語覚えて。

■「のしろ日本語学習会」から見えてきたもの

野山 分かりました。ありがとうございました。それでは引き続いて、池田さんが話された二ツ井町の公民館の講座のことも含めて、これまでの能代の日本語学習会全体のことと、これからのことについて、生涯学習や社会教育の観点から藤田美佳さんに発表してもらいます。

藤田美佳 池田さんが、中国語講座の講師として活動した秋田県二ツ井町公民館、今は二ツ井町は能代市に合併してしまっていますが、そこで行われた「助け合いの中国語講座」の成立過程から、多文化社会のまちづくりということを考えてみたいと思います。

その前に、私がこの「のしろ日本語学習会」とどういふかわりを持っているかに少し触れておきます。私自身、秋田県能代市の出身です。仕事を辞めて地元に戻っている時のことです。うちは商売をしているのですが、そこに、高校時代の担任とALT（Assistant Language Teacher＝外国人青年招致事業による外国語指導助手）が来て、ALTの彼女が公民館で受け持っている英会話講座を手伝ったらどうかと言われ、指定された日に行ったら、それは英会話講座ではなく、「のしろ日本語学習会」の教室でした。そこで、教室にいる方に「私、ALTの○○さんに英語と言われて来たんですけど、どうしたらいいでしょうか」と話していたら、ALTの彼女がやってきて、「日本語教室にはたくさんのボランティアがいるけれども、自分の担当のボランティアが少ないので、できれば英会話講座ではなくて日本語教室に参加してほしい」と言われました。そこから半年で東京へ